

悠久の京を訪ねて

Vol.2



京は古より人々が集い、その気候・風土を織り交ぜ、日本の中心地として生活が営まれてきました。

それは京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのかを知ることが、これからの生活を考える上でも重要な事だと言えます。出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

石清水八幡宮の中の地鎮のあと

京都府八幡市



地鎮に使われた密教法具

石清水八幡宮の境内にある護国寺の発掘調査で地鎮(おしずめ)のあとが見つかりました。土地そのものではなく建てようとする建物の土台を鎮めるマツリを行ったあとと考え



写真1: 輪宝・独鉗杵出土状況



輪宝

独鉗杵

上下写真提供: 八幡市教育委員会

られます。

車輪状の輪宝の中心の穴に、独鉗杵(りんぼう)のどっこしよ、とこしよ、など読み方はいろいろ)という棒のような法具を通して地面に張り付けた形でみわかりました(写真1)。輪宝は車輪に刀などの刃を放射状に付けた古代インドの武器です。千手観音や如意輪観音が手にするほか、現在のインドの国旗の真中にも描

かれています。独鉗杵はこれもインドの武器が原型と言われ、両端の爪が3本の三鉗杵(さんくしよ)や5本の五鉗杵(ごくしよ)もあります。これらは仏教をまもる金属製の法具です。

遺跡から出土する輪宝

さて、豊臣秀吉が聚楽第を建設し、京都の町がその城下町になった時代、大名屋敷が新築・改築を繰り返していた頃、かわらけに輪宝を描いたものが地鎮に使われたようです。烏丸通りの府民ホールが発掘調査で出土したかわらけもその一つです(写真2)。



写真2: 輪宝を描いたかわらけ

また、秀吉が伏見城をつくった時、現在の桃山高校の敷地には萩の毛利家の上屋敷が建てられました。その軒先には金箔を押した輪宝文の瓦が葺かれていました。さらに江戸の毛利屋敷の地鎮遺構では、金銀製の永楽通宝3枚などと共に金メッキの輪宝が出土しています。